



すずきは

うちひしがれた

「ねーねー、やっぱ告ってきたー!？」

---

夕方4時

化学準備室で女の子を待つ。

来た女の子の前でテンパる鈴木。

「えっと・・・えー、あの・・・

好きです！」

女の子「ごめんなさい」

足早に部屋を出ていくその子。

そして  
何か、聞こえる。

あれ？

っていうか、  
すげー大きな声が聞こえるぞ・・・

「ねーねー、やっぱ告ってきたー!？」

「うん、予想通りだねー」

「ぎゃはははマジ■\$○☆・・・

ていうか

メッチャ聞こえてるんですけど・・・！！！！

どんだけどうでもいい存在！？

打ちひしがれた鈴木は思った。

「ぬうう・・・もうこんな思いは  
二度としたくない！！」

その時の鈴木には知る由もなかったが

こういう時、男には  
2つの選択肢が迫られる。

1つ目は、

もう二度とこういう失敗はしたくないと  
女の子にアタックするのをやめる

2つ目は

もう二度とこういう失敗はしたくないと  
恋愛スキル、トークスキルを磨き、  
ひたすら経験を詰む

そのどちらかである。

鈴木の出した答えは2だった。

さらに鈴木は欲張りだった。

外見も変えてしまおうと企んだのだ。

「あ、鈴木君、ニヤニヤ・・・」

---

放課後呼び出した女の子に

「やっぱ告ってきたー」  
「ぎゃはははマジ受けるー」

という会話をおもいきり  
聞かされた鈴木は

打ちひしがれながら  
次の日も学校へ登校する。

そして鈴木は目の当たりにした。

「あ、鈴木君、ニヤニヤ・・・」

「おー！鈴木、ニヤニヤ・・・」

「ざわざわ・・・ざわざわ・・・」

え？

ええ??

連絡網でもあんの!?

鈴木はテンパった。

なぜか鈴木 of 愚行っぷりを  
知っている人物が教室の  
大半を占めていたからだ。

どうにかしなきゃ！！

この時鈴木は少し方向性を間違える。

芸能人に・・・なるしかない！！

ちっくしょー、今に見てろよー  
TVに出てキャーキャー言われてやる！！

そして週末には新宿御苑まで行って  
芸能プロダクションに自分を  
売り込みに行くという

謎の行動力を発揮した。

結果はもちろん、

言わなくてもわかるよね

さらに打ちひしがれた鈴木は  
ここでようやく方向性に気づく。

自分の、身の丈にあった  
解決方法を選ばなきゃダメだ。。

そして、

次の日からいろいろな  
試行錯誤を繰り返したのだった

担当者：「「学校へ行こう」とかに出れますよ」

---

行動力だけはあった鈴木。

女の子に告白するのも、

身の程を知らず芸能プロダクションに  
自分を売り込みに行くのも、

失敗する恐怖より  
よくわからない情熱のほうが勝っていたのだ。

芸能プロダクションの担当者に  
いろいろ説明を受けたが、

要約すると

「学校へ行こう」とかに出れますよ

冴えないオタク系男子の企画とかね。ニヤニヤ

要はそんな感じだった。

実際はこちらの気持ちを配慮して  
話してくれた。



だが・・・

顔が微妙だから・・・って感じを

直接言わず、なんとか鈴木にわからせようと  
何度も切り口を変え、表現を変え、

オブラートに包まれて話されたのが  
鈴木を折った。

(学校へ行こう、は当時高校生の間で  
すごい流行っていたV6の番組

大量の冴えない高校生が出ていた)

だめだ。

いきなり階段すっ飛ばして  
ゴールは無理。

とりあえず、

平民以下の俺は平民になるための  
努力をしなければならない・・・

そのためには何がある??

奇しくもそのヒントは  
心を折られた担当者の言葉の中にあった

「学校へ行こう」である。。

2, 3ヶ月後、学校へ行こうで  
「アイプチ」の存在を知った。

冴えない男子学生をイメチェンする企画である。

髪型を変え、  
ファッションを変え

一重の人はアイプチを使って二重に変え・・・

「アイプチ??  
こんなアイテムあるんだ!？」

鈴木の中に衝撃が走った。

## やってる人が2人いた

---

こんな便利なアイテムがあるんだ。

整形などは一切考えていなかった鈴木は、これなら簡単に出来そうと

アイプチについて調べてみることにした。

そしたら、  
衝撃の事実が発覚。

え、〇〇さんも〇〇君もやってるの？

やってる人が  
クラスメイトに2人いた。

マジか！

超ラッキー！  
いろいろ聞いてみよう♪

女の子に告って振られ、  
クラス中にその愚行を知られていた  
鈴木の影響はとりあえず最悪だったが

アイプチやっている人からすれば  
仲間が増えるのはウェルカムだったらしく

付け方とか教えてもいいよと言われた。

でもあんま仲良くしてると  
思われたくないらしく

人がいる所ではあまり話しかけないでね。

と言われた。

鈴木は2、3ヶ月ぶりに  
打ちひしがれたが、

なんとかこらえた。  
ちょっと泣きたくなったけど。

そうしてアイプチの使い方を  
教えてもらった鈴木は、

さっそく近所のドラッグストアに  
足を運ぶのだった。

## 「怪しい物買いに来た～」

---

下校時、

アイプチを買うため  
ドラッグストアへと向かう鈴木。

やったーこれで  
二重が手に入るぞ！

鈴木は高揚していた。

だが、ドラッグストアに入り、  
鈴木は一瞬フリーズした。

店員が、女子高生・・・！！？

げ、へたしたら同じ学校の生徒かもしれない。

まずい。  
絶対買えない。

買ったら

パターン1 「へえ～・・・ニヤニヤ」

パターン2 「キモ」

このどちらかのパターンになる

軽く女子高生にトラウマを  
抱えていた鈴木の内脳では

どう転んでも、その2パターンに  
分類されるのみだった。

鈴木は打ちひしがれた。

当時はamazonなんて無い。

いや、あったかもしれないけど  
ガラケーを高2で初めて手にした鈴木は  
amazonなんて知らなかった。

どうしよう。  
他のドラッグストアに行ってみよう。

そして次の店でも  
自動ドアが開くと同時にキョドった。

また女子高生じゃねーか！！

ドラッグストアのバイト流行ってんの！？

キョドっちゃったし、なんかもう、

「いらっしやいませ〜」

のトーンが、

「怪しい物買いに来た〜」

って言われてるようになんか思えなくなって来た。

ダメだ、出直そう。

鈴木は自宅へ帰るのだった。

「すげえ！俺の目、キムタクみたい！！！！」

---

アイプチを購入しようとするも、

あえなく女子高生に撃退された鈴木。

こうなっては仕方ない。

おばちゃんタイムを狙うしかない。

おばちゃんタイムとは、

コンビニもスーパーもドラッグストアも  
レジがだいたいおばちゃん一色になる

そんな、平日朝から昼過ぎまでの  
おばちゃんパラダイスの事を指す。

たまにフリーターが潜んでいるので  
注意が必要。

おばちゃんタイムを制し、

先日とは打って変わって  
あっけなくアイプチを  
手に入れることが出来た鈴木。

やった！

ついに手に入れたぞッッッ！！！！

家に帰り、まぶたに  
アイプチを塗りたくる鈴木。

「すげえ！俺の目、キムタクみたい！！！！」



教えてもらった使い方を  
完全そっちのけでひたすら  
目に塗りたくった。

まぶたを極限まで奥の方に押し込み、  
その上からアイプチで塗り固める

「一回、どれだけ大きくなるのか見てみたい」

という衝動に駆られ、アイプチを  
手にした人物が一度はやる行為だ。

普通の人なら、ここで

「これは明らかに不自然だな、  
素の状態での大きさはまず無理」

と、自分の目にあった二重ラインを  
見つける段階に入る。

だが鈴木はそんな単純なことにも気づかず、

そのうちこの大きさに定着  
したらいいな、と思った。

次の日にアイプチテクニシャンである  
クラスメイトに

この感動と、  
自分の目がメッチャ大きくなるかもしれない  
未来のワクワクを話した。

そしたら

「ありえない」

と一蹴された。

鈴木は打ちひしがれた。

## リベンジしてやる・・・！！

---

目にアイプチを塗りたいくり、  
まぶたをとにかく押し込みまくる。

この方法ではダメなことを  
なんとか理解した鈴木。

とりあえず目が自然に開くラインを  
見据えてアイプチを付けることにした。

「うーん、これなら自然か??」

今まで一重だった人間が

二重っぽい自分の目を見て  
自然かどうか?を判断するのは難しい。

ただ、

アイプチ塗りたいくって作った  
異常な大きさの二重よりはだいぶマシに見えた。

「よし・・・」

リベンジしてやる！！」

以前友人に無理やりやらされたナンパ。

その時は女子高生2人組に

「はい？」

「何こいつ？」

という対応をされた鈴木。

あの時の記憶を早く脳内から  
消し去って上書きしてやりたい。

頭の片隅ですっとそのことを  
考えていた鈴木は、

早くもリベンジしようと企んだのだ。

アイプチつければ、とりあえず  
はたから見た顔の雰囲気はすぐ変わる。

その状態でどうなるか？  
試したくて仕方なかったのだ。

休日、駅前へと自転車を走らせる鈴木。

ドクンドクンドクンドクン・・・

鈴木の内臓は  
以前ヤンキーに絡まれた時以上に  
心拍数が上がっていた。

ちなみにその時のヤンキー

ヤンキーA「どうする？こいつらやっちまう！？」

ヤンキーB「え？ど、どっちでもいいよ」

鈴木（どっちでもいいんかい！！）（ドキドキ・・・）

片方は「クローズ」に出てきそうな  
犯人顔の大男だったが、

片方がヘタレで助かったのだ。

それにしても

## サイドメニューにポテトでもつけとく？

みたいなノリで、人を殴るかどうかが  
決めるのはやめて欲しい。

そんなことがあった現場を  
通り過ぎながら

鈴木は駅前の駐車場へと自転車を止め

人通りの多いメインストリートへ  
歩いて行くのだった。

## インテリ型モンスター

---

駅前のメインストリートに  
到着した鈴木。

毎週歩いている慣れた道が  
いつもとは全く違う景色に見える。

何故か通る人、通る人全てが  
自分の一挙一動を観察するために  
歩いているようにすら、思える。

そして鈴木は思った。

ナンパ師、ハート超強えええええ！！

ナンパ師達は一人残らず  
こんなドキドキを乗り越えていったの！？

ナンパ師に尊敬の念すら覚えた。

道を歩いているうち、

鈴木は吐きそうになった。  
頭もふらふらしてきた。

「ぐうう・・・いざやるとなると  
こんなに緊張するもんなのか・・・」

そしてつかの間

頭の中で家に帰ってだらだらしている  
自分の姿がイメージされ始めた。

「マズイマズイマズイマズイ」

ここで家に帰ったら  
この先、一生コソコソ生きてく  
ハメになるよ！！

自分に言い聞かせた。

だが、辺りを見回すと  
モンスターが街を闊歩しているようにしか  
見えなかった。

どいつもこいつも

ナンパ野郎が玉砕するところを観察し、  
それを何よりの糧として生きる  
インテリ型モンスターにしか見えなくなってきた。

そうそういるわけないのに

「知り合いがいるかもしれない・・・！！」

とかも思い始めてきた。

知り合いに見られる

→例の連絡網でクラス中に広まる

→鈴木の評価がさらに落ちる

最悪のパターンが延々と  
脳内で再生され始めていた。

そして

3時間が過ぎた



鈴木はまだ

「絶対やらなきゃ！！」

と「メッチャ怖えええ」

を繰り返していた。

なぜこんなことに気付かなかったのか。

---

駅前にナンパに繰り出すも  
3時間何も出来ずにウロウロしていた鈴木。

鈴木は心は折れ始めていた。

いい加減、ティッシュ配りの  
お兄さんに気づかれているかもしれない。

携帯ショップの呼び込みの前も  
多分5, 6回通りすぎた。

「ドコモの新機種でしたー」

とか叫ぶ合間にこちらを見、  
ニヤニヤする始末・・・

鈴木は打ちひしがれた。

ただの営業スマイルだけどね。

ありとあらゆるネガティブな  
感情が頭のなかを占め、

鈴木はついに心が折れた。

「もういいや、帰ろー・・・」

自宅まで35分の自転車の道のり。

途中まで、自分がどうやって  
自転車をこいできたのか

それすらも覚えていないような  
放心状態だった。

「ああ、なんで俺は生まれてきたのかなー」

とか意味不明なことまで考え始めた。

そしてイライラしてきた。

ちっくしょー、あの呼び込み野郎  
ぜってえお前も出来ねえだろ！

ティッシュ野郎！  
お前とはハードルが違うんじゃ！！

くそー、あいつらさえいなければ・・・

完全なる被害妄想である。

だが、この被害妄想が  
鈴木にヒントを与えた。

「ん？」

「あいつらさえいなければ？」

鈴木は、ひらめいた。

「あ！！」

「そうだ！！」

「知らない街にいけばいいんじゃない？」

なぜこんなことに気付かなかったのか。

連絡網の恐怖を体感した鈴木は  
こんな地元でナンパなんて出来るわけがない。

結局のところ  
一番大きなブレーキは

「知り合いがいるかもしれない」

「知り合いに見られているかもしれない」

「声をかけた子が同じ高校かもしれない」

ということだったのだ。

鈴木はすぐさま、  
最寄り駅から5、6個離れた  
大きめの駅を思い浮かべた。

あそこしかねえ！！

なぜか、今なら余裕で  
ナンパ出来そうな気がしてきた。

鈴木はさっそく次の休日に  
狙いを定めた。

## 鈴木は横から話しかけた！！こちらを見る女子！！

---

最寄り駅から5, 6個  
離れた駅に来た鈴木。

「よし、ここなら  
知り合いもないだろ」

以前とは驚くほど違い、  
余裕でナンパが出来そうな気がした。

ネット上で、  
匿名だと大胆な発言ができちゃう、  
あの感じに似ていた。

「さっそく行くか」

自分を熟練のナンパ師だと思い込み、  
そういう奴になりきって歩いた。

はたから見たら怪しい奴に見えただろう。

よし、あの子だ！！

鈴木は気合を入れた

駅からちょっと離れた歩道。  
人通りは少ない。

信号待ちをしているその子に  
後ろから、すーっと近づいていく鈴木。

ドクンドクンドクンドクン

心音がバカみたいにでかくなる。  
だが、鈴木は止まらなかった。

ここまで来たら  
もう、まわりに誰がいようが、  
声をかけるのみ！！

(うおおおいっけええええええ)

「ね、ねえ」

鈴木は横から話しかけた！！

こちらを見る女子！！！！

そして、

鈴木は言った！！！！

「あの、お茶・・・お茶・・・」

言葉がそれ以上出てこなかった！！！！！！



女の子「(・・?)」

苦笑いをし、軽く頭を下げ  
前へと歩く女子。

鈴木はそれ以上足が動かなかった。

ドキドキドキドキドキドキドキ  
ドキドキドキドキドキドキドキ.....

10分くらい心臓が  
ドキドキしていた。

頭のとっぺんからつま先まで  
血液がバカみたいに流れているのを  
前身で感じた。

そして少し落ち着いた鈴木は思った。

「あんまりやな顔されなかった！！！！」

鈴木にとっては衝撃的だった。

いきなり横に来た  
意味不明な奴が「お茶・・・お茶・・・」  
とか言っているのに、

ごめんなさいね  
って感じで頭を下げて歩いて行った。

鈴木は思った。

やっぱ顔の印象だよ！！！！

鈴木は

行ける！多分行ける！！  
と思った。

なにが行けるのかはよくわかってない。

ナンパして、どうなれば  
目的達成なのかもよくわかってない。

女の子に声をかけるだけが  
鈴木その日のミッションだった。

その日鈴木は  
ものすごい満足感を手にした。

あとで考えれば、

声をかけた女の子が  
単に人のいい子だっただけかもしれない。

でも、

今までの顔でこんなことは一度も無かった。

この出来事が

鈴木を今までと違う人物に変えていった。

## 初期設定で「下の下」

---

第一印象が悪ければ

その後何をしてもあまり評価は変わらない。

たとえ普段はかなり紳士的な  
人間だったとしても

初対面で酔っ払いまくっており

「ぐへええーお姉ちゃん、グへへええ」

とかひたすら言ってれば、

その後いくら紳士的な態度で  
いいことをしようが、

その人物の評価は滅多に覆されない。

これを鈴木は高校生の頃から  
感じていた。

顔がね、もう

「ぐへええ」

とか言いそうな感じだったから。

もう何をしようとグへへ顔の  
印象は抜けないんです。

そのため、  
アイプチを付けて外見を変えても、

すでに以前の鈴木を知っている人間の  
反応は変わらないことに気づいていた。

だが

これは逆にチャンスでもあると思った。

すでに以前の鈴木を知っている人物は、

鈴木がたとえ、整形しまくって  
キムタク的な顔になろうとも、

何も思わないのだ。

つまり、

初期設定で「下の下」と思われていれば  
滅多なことでは、評価は上がらない。

そのため逆を言えば、

アイプチ付けて登校しようが、

「また鈴木がテンパって  
なんかやってる。ー(´▽`)」

で、済むのだ。

むしろ、ほとんどの人物が  
気にもとめていない。

これはチャンスだった。

つまり、鈴木は

高校生の間は、  
定着した平民以下という  
ポジションに甘んじ、

二重を定着させることのみを費やそうと  
考えた。

そして、

卒業後、素の状態です重を作り  
新しいキャラで過ごそうと考えたのだ。

だが、

鈴木は欲張りである。

定着させてる途中の、高校生の間でも、

外見を変えたことの反応を見たくて  
ウズウズしていたのだ。

ナンパor出会い系サイト・・・  
鈴木を2つのキーワードがよぎった。

「あれ？友だちの紹介とかもあるんじゃない？」

と思うかもしれない。

そこは

お察しく下さい

鈴木は一番手っ取り早そうな  
出会い系サイトに目をつけた。





## 今度の土曜、会おうよ

---

アイプチを付け、  
外見を変えた鈴木は

出会い系サイトを使ってみようと思った。

なにがどうなればOKなのか？

そんなこともよくわかっておらず、

とりあえずプロフィールを作り、  
同じ県内の女の子にメッセージを送る

そんな感じを2, 3やってみた。

すると、3人くらいメッセージを  
送った時点で、

変なメールが来た。

詳しくは覚えていないが、

要は

「シャチョサーン、シャチョサーン  
お金頂戴よ～」

みたいな感じだった。

スルーした。

そして、5人くらいにメッセージを  
送った時に

いい感じに明るそうな  
女子から返信が来た。

「〇〇市？2個となりだ！結構近い！」

さっそくメールを返す鈴木。

結局メールは5, 6日続き、  
鈴木は思った。

やっぱ、お互い顔知らないのって  
俺にとってはいいことだ。

顔がわからない状態なら  
全然そこら辺のやつと同じ  
土俵にたてるじゃねーか。

そう。

メールは第一印象が文章。

顔は関係ないのだ。

もしこの人物に、

鈴木の初期の顔で、

「実際に会った後、メール交換」

という流れなら

間違いなく、メールなど  
続かなかっただろう。

学校でも、バイトの休憩中も、  
とにかくメールを交換しまくり

ついに、

## 今度の土曜、会おうよ

みたいなメールが来た。

鈴木は焦った。

「まじですか！！！！」

「何を話せばいいの!？」

「何を着ていけばいいの!？」

「えっと、えっと・・・とりあえず

その日は3, 4時間だったら時間作れるよ。送信・・・」

「ふう・・・」

鈴木にとって最大の試練が

襲いかかる。

## 行き当たりばったりで当日を迎えた鈴木

---

出会い系サイトで  
メールをしていた女子から

「今度の土曜、会おうよ」

というメールを貰った鈴木。

鈴木はナンパした時以上に  
ドキドキを抑えきれずにいた。

なぜなら、

どこかのお店とかに入って、  
二人きりで1, 2時間話すことになる。

「とりあえず女の子に声をかければOK」

というものとは  
まったく別次元のハードルに思えた。

「何を話せばいいんだああああ！！??」

鈴木は脳内でいろんな妄想をし、  
勝手に打ちひしがれていた。

「あっ、えっと、あ、あ、あの一」

「キモ、帰る」

うわああああああ

「あのさ、えっと、あの、その・・・」

「あんた何人？」

うわああああああ

「えっと、えーと。え、え、」

「バルス」

うわああああああ

想像はやめた方がいい。鈴木は思った。

身が持たなくなるからだ。

行動を起こさないよりは  
何倍もマシなのだが

鈴木はいつも行き当たりばったりだった。

今回もとりあえず  
思いつきで始めた出会い系サイト。

当然、事前の対策も無いし  
情報収集も一切行っていない。

結局、

何の対策も立てることができないまま  
当日を迎えた鈴木。

待ち合わせの駅に向かっている  
電車の中で

鈴木は下痢と戦っていた。

うわああああああ

いい子そうで笑顔がかわいい女子 ｷﾀ━━━━(°▽°)━━━━!!!!!!!

---

女の子と会う当日  
電車の中で下痢と戦っていた鈴木。

「あと2駅、あと2駅、フウウー」

緊張するイベントの際  
電車での下痢率は軽く80%を  
超える鈴木。

鈴木は緊張と腹痛で  
変質者のような動きを繰り返していた。

そして駅につき、  
トイレに駆け込み、

なんとか落ち着いた鈴木。

待ち合わせの時間まで5分を切った。

心臓がハンパない速度で動いている。

ドキンドキンドキンドキン

そして、メールが鳴る。

「改札前のパン屋の前にいるよ」



「もういる！！！！！」

パン屋の方を見る鈴木！！

女子が一人立っている！！！！

「いる！あそこに女の子いる！！  
顔はよくわかんないけど、  
とりあえず、いる！！！」

鈴木はテンパった！！！！

だが、もう後には引けない！！！！！！

ゆっくりと近づいていく鈴木！！！！！！

それに気づく女子！！！！！！

笑顔に変わる女子！！！！！！！！！！

(おおおお！！笑った！！！！！！)

鈴木は笑顔によって  
緊張が一気に和らいだのを感じた！！！！！！！！

お互いの距離はもう2メートルも  
無かった。

話しかける鈴木。

「えと、〇〇ちゃん？」

「うん、よろしく」

いい子そうで笑顔がかわいい女子

キタ————(°▽°)————!!!!!!!!!!!!

## デート場所はなぜかイトーヨーカドー

---

いい子そうで笑顔がかわいい女子がキタ。

おそらくクラスのグループでは  
漫画・同人誌好きなグループ？  
のような感じだろう。

鈴木は結構そういうタイプの  
女子が好きだった。

ちなみにお姉さん系も好きだし  
スポーツ女子も好きだった。

要はただの女好きだった。

そして会話が始まる。

「なんか変な感じだねー」

「そうだねー」

出会い系で出会った男女が  
一回はやりとりするであろう会話だ。

この子は中高と女子校らしく、  
男と接点が無かったという。

「なるほど！！」

「だからこんなメール下手な俺でも  
サクサク進んだのか」

会話しながら鈴木は思った。

今思えば、女子大の文化祭に行った時

「ホットドッグいかがですかー？」

はただの見せかけで、  
これただの逆ナンじゃねえか  
という光景を何度も見た。

出会い系で会ったら

まあ、最初はだいたいカフェや  
ファミレスに入るのが普通だろう。

だがなぜか鈴木達は  
駅前のイトーヨーカドーの  
エレベーター横のソファで2時間話した。

家に帰る頃には  
正直、会話の内容はほとんど  
覚えていなかった。

だが、

男の接点が無い女子

と

非モテ男が顔変えてデビュー

の間では、もうだいたいこんな感じになる。

「えっと、つ、付き合う・・・？」

「うん、いいよ」

その瞬間だけがひたすら  
鈴木の頭の中で繰り返されていた。

そして、鈴木は思う。

「よし、バイトいっぱいやって  
プレゼント買おう！！」

それまで、

顔が微妙すぎ+暗すぎのため  
あらゆるバイトに落ちてきた鈴木。

その時は誰でも受かる  
人材派遣のバイトの登録はしていた。

土日使ってバイトして、プレゼント買おう！！！！

だが、このプレゼントで  
鈴木はドン引きされることになる。



## ドン引きされる鈴木

---

平民以下のポジションを受け入れ、

クラスで空気のように過ごしていた鈴木。

だが、出会い系サイトで  
出会った女子と付き合うことになってから

「ぐはははは。お前らが空気のように  
扱っている俺は、まさかの彼女持ち！  
貴様らの大半より上！！」

と、脳内で優越感に浸っていた。

こうなると面白いもので、  
勝手に自信がつき、

振る舞いも変わってくる。

人の変化に敏感なのはやはり女子。

鈴木に対するクラスの女子の対応も  
なぜか少しづつ変わっていった。

だが、平民以下が平民になった程度。

そして、

恋愛テクはからっきしダメダメな鈴木。

この後、愚行を行うことになる。

彼女にプレゼントを買おうと  
決めた鈴木は、



土日を使って人材派遣のバイトをした。

そして、

人材派遣の事務所がある新宿に行き、  
3万円ほどバイト代を受け取ったあと、

鈴木はルミネに向かった。

そこで買ったものとは・・・

まさかの

## ペアリングである

デート2回のみ。

まだまだお互い探し探し。

そんな状態で、まさかの

ペアリングを購入したのだ。

3回目のデートでそれを渡す鈴木。

ドン引きされた。

そしてそれ以降、  
徐々によそよそしくなった彼女、

そして彼女との関係は

いつの間にか自然消滅していた。

だが鈴木はこの経験で  
多くを学んだ。

そして思った。

「ペアリングは完全やっちゃったけど  
外見変えたのは普通に正解だったわ」

「とりあえずいろいろ経験すれば

この先もっと良くなるはず」

鈴木はさらなる  
ステージを目指そうと思った。

これが顔で判断されない人が送っている毎日か・・・！！

---

ペアリングを渡し、  
ドン引きされ自然消滅した鈴木だが

一つのいい経験になったと  
そこまで落ち込まなかった。

これからは今までより、  
明らかに楽しい毎日になってくはず

鈴木はそう確信していたからだ。

他校の文化祭に行った時も  
高校生ばかりの日払いバイトに行った時も  
中学校の友人の知り合いの女子と会った時も

明らかに今までより  
相手の対応が変わっていた。

鈴木はちょっと泣きそうになった。

「これが顔で判断されない人が  
送っている毎日か・・・！！」

アイプチを使い、

それと同時に

髪型をまともにしたり  
服もダサくない程度にはできたり

そんな事をしていって、

とりあえず普通っぽいキャラに  
なることが出来た鈴木。

明らかに初対面の人の対応が、  
違いすぎる！！！！！！

嬉しくてしょうがなくなり、  
内面もより、自信に満ちたものになっ  
ていっていると、

鈴木はひしひし、感じていた。

それから鈴木はコミュニケーションや  
人間関係、恋愛などなど

いろんな研究をした。

積極的にモテまくっている男と  
一緒に行動するようになった。

モテまくっている男と一緒にいると、  
かなり美味しいことがある。

それは、

モテ男のテクニックを  
近くで吸収することが出来る  
ということだ。

モテ男の言動、行動を真似してると  
自分も自然とモテるようになる。

どんな言葉を使っているか？  
どんな切り返しをしているか？  
どんな行動を取っているか？

ココらへんは、パクれるところが  
いくらでもある。

鈴木はいろんなモテ男の  
いいところをパクりまくった。

そんなことを繰り返していたら、  
今までの鈴木では考えられない  
ことが起こったのだ。

# いきなりキスしてきた！！

---

自分にちょっとだけ自信ができ、  
接客業のバイトを始めた鈴木。

そこで、半年ほど早く  
働いていた2つ下の女の子がいた。

クラスにいたら  
おそらくかわいい系グループにでも  
属しているような子だろう。

バイトを始めて1ヶ月くらい  
経った頃から、異変が起こる。

その子が、

やたらアプローチしてくるのだ！！

鈴木は自分に起こっていることが  
あまり理解できなかった。

バイト中にやたら体を触ってきたり  
ひたすら会話を恋愛の話に誘導してきたり

そして、挙句の果てには

バイト終わったあとの  
エレベーターの中で、

いきなりキスしてきた！！

「なんじゃこりゃ、

えっと・・・

なんじゃこりゃ！！！！！！」

鈴木はテンパった。

数秒固まっている所

「ドア開いてるよー笑」

と、外へ出て行くその子。

そんなこんなから、次の日には  
半強制的に付き合うことになった鈴木。

鈴木は思った。



ちょっと前の自分と  
まったく別人の人生を過ごしてるみたい。

と。

外見を変えたこと

ナンパやら出会い系やらで  
経験積んだこと

人と交流する機会の多い場所に  
自分から進んで入っていったこと

モテ男の行動や言動を  
パクってみたこと。

それらが鈴木を明らかに  
今までと違う人物へと変えていったのだ。

## 第一印象の差でこの違い

---

完全なる平民以下の人間

嫌われるでもなく好かれるでもなく、

とりあえず気にも留められてないタイプ

そんな空気の存在だった鈴木。

女子に告白し、玉砕したあと

メッチャ聞こえる声で

「あいつやっぱ告ってきたー」

「ウケる〜」

を連呼され

友人にナンパしてみと言われ

やってみたところ

「何こいつ？」

という顔をされ、

いろいろな場面で

打ちひしがれてきた鈴木。

そんな鈴木は、一番最初に

・外見を変える

ことを皮切りに、

- ・ナンパにリベンジたり
- ・出会い系サイトを使ったり
- ・接客業バイトをやってみたり
- ・モテ男を徹底的にマークしたり

いろいろな経験を経て

まったく別人のような毎日を  
手に入れることが出来た。

そんな経験をする、  
面白いことがどんどん起こる。

バイト場ではいつの間にか

恋バナ相談といえは鈴木

そんなポジションが定着してしまい、

カッコつけて

「あーはいはい、あるよねー  
そういうパターンは引くよね～  
それ切ないよねー」

と、ドヤ顔で人の話を聞くキャラに変貌した。

ただ、当然学校内では  
普通に空気系キャラが根強く残っている。

学校内でのクラスメイトへの第一印象と

バイト内でのスタッフへの第一印象が

まったく違うからだ。

これを理解した鈴木は、

バイト場にいる時のような自分で  
これから高校卒業後も過ごして行きたいと  
思った。

そんな中、  
中学校の頃の後輩から

バイトを紹介して欲しいという  
連絡を受ける鈴木。

普通にいいよーと返信しようとした矢先、

「げ！、やべ！！」

「あいつ俺の一重の頃知ってんじゃん！！！！」

鈴木は焦った。

## 少しだけ長い目で見られることを覚えた鈴木

---

中学生の時の後輩から  
バイトを紹介して欲しいと言われた鈴木。

鈴木は焦った。

「あいつ俺の一重の頃を知ってるじゃん！」

高校ではとっくに目を変えたことを  
バレている。

バレているというか  
気にもとめられていないのだが。

だから高校でどうなろうと別にいい。

ただ、  
バイト先でバレたら、

せっかく、今まで積み上げてきたものが・・・

すべて崩れてしまう！！

鈴木は思った。

だが、中高の頃の鈴木は人の頼み事を  
一切断れないヘタレだった。

加えて、

その後輩は

運動神経ゼロでレギュラーを後輩に  
奪われるレベルの鈴木にも

普通に接してくれる可愛いやつだった。

こいつの頼みは断れない。  
もう、しゃあない。

バレたらバレたでいいや～

と開き直った鈴木は

「OK、店長に話すとくよ」とメールを返した。

そしてしばらく経って  
ふと、鈴木は思った。

ていうか、積み上げてきたってか  
別に大したもんじゃないよな

別に今のバイトの世界が全てでもないし

高校卒業したら明らかに  
今までと違うキャラで行けるわけだし

今までが平民以下の人生だったからこそ

今までと全く違うポジションを  
手に入れられているバイト先に価値を  
置きすぎてしまっていた

鈴木はそう思ったのだ。

高校卒業したらそのバイトも  
やめるだろうし、

とりあえず今は卒業後を考えて動こう。

鈴木のおいは固まった。

そして3日後

久しぶりに中学校の後輩と会った鈴木は

驚愕することになる。

## 後輩の予期せぬ一言

---

後輩が鈴木に発した一言。

それは鈴木にとって  
予期せぬ言葉だった。

久しぶりに会い  
バイトについての話をしている時、

ふと後輩は言った。

「鈴木先輩、全然変わってないっすね」

「!!!!????」

全然変わってない!!??

「え?そ、そう。」

鈴木は逆に焦った!!



全然変わってないっすね。

まじですか？バレてない。

いや・・・ってか

全然変わってないってどういうことだ！？

ちょっと待てよ・・・

一応、髪型とか服装とか  
そういうものもいろいろ変えたんだけどな・・・

ヘタレキャラっぽい感じが  
全然変わってないってことか？

というより、  
目はまったくバレてないのな・・・

いい意味にも悪い意味にも聞こえる。

そこで鈴木は我慢できず、言ってみた。

「まじかー、一応髪型とか  
いろいろ変えたんだけどねー」

と。

そしたら後輩。

「ああ、高校に入ったらみんな  
変わりますよねー

タメの奴でも髪染めたりしてますしー

でも、似合ってなかったり  
そいつっぽく無くなったりしてる奴も  
多いじゃないですかー

でも先輩は何か昔の感じだなーと  
思っただけっす」

「あー、なるほど」

おそらく一応先輩ということ  
をたててこう言ってくれているのだろう。

ひとつ言えることは、

結局、目はバレていないということだ。

「整形したんすか？」

とか言われるのかなと覚悟してただけに、  
完全、肩すかしを食らった気分だ。

後から思ったことだが

鈴木自身、後輩の顔をまじまじと  
見たこともなかったし、

昔と比べて「後輩の顔」が  
変わっているかどうか？

それは鈴木にも全くわからなかった。

つまり、

人は1年、2年、3年と経っていくと  
徐々に、その年月が長くなるほどに、

その人の顔、というよりは

イメージや雰囲気的印象しか  
覚えていないものなのだ。

2, 3年も経てば顔の造形など  
ほとんど覚えていることはない。

より覚えていることと言えば  
「その人の声」や「会話」くらいのものだ。

例えば10年前にTVで聞いた曲も、

その人の歌声やメロディーは覚えているが、  
顔はほとんど覚えていないことのほうが多い。

だから、変化をほとんど悟られなかった。

そして、この後も、

小学生の頃の、

一重まぶただった頃の鈴木を  
知っている人物と久しぶりに会うことになる。

そこで、

またさらなる興味深い事実が  
鈴木を襲うことになる。

## 別人マジック

---

久しぶりに会った中学の後輩に

「全然変わってないっすね」

と言われた鈴木。

これに加えて、

鈴木はさらなる興味深い事実に出会う。

小学生時代の友人と久しぶりに  
4人で集まる機会があった。

その時も、

「整形した？」

とか言われるのかなと  
ビビっていた鈴木だったが、

集合場所にまず現れた一人目の友人を見て、

変な違和感を感じた。

あれ？  
こんな感じだったっけ・・・？

んん・・・？

おそらく、お互いがそう思ったはずだ。

そう、

相手の顔が何か別人みたいになっ  
ているのだ

そして、

次に現れた友人を見て

また思った！！

「あれ？なんか変わってね？」

おそらく、3人してお互いを見ながら  
そう思ったはずだ。

ほんとに集合場所、ここか？

「いやーひさしぶりーうへへー」

とか言っちゃったけど、  
こいつら他人じゃねーのか？

俺、やっちゃったのか？

それぞれがそう思ったはずだ。

そして最後に現れた友人を見て・・

「あれ――？なんか変わってね？」

と、多分みんな思った！！

「すげー変わったな！！」

「なんか大人みたいになったな！！」

「背、伸びすぎだろ！！」

それぞれが、皆に対して、  
こんなセリフばかり出てくる！！

そう、小学生の友人に  
5，6年ぶりに会ったら

どんな人でも

もはや別人にしか見えないのだ。

鈴木は安堵した。

これ、小学生時代の友達とか、  
ほぼバレねーじゃん。

だってみんな変わりすぎだもん。

そして思った。

小学生なんて、いわゆる子供の顔で、

高校生とかそれ以上になったら  
大人の顔になってくわけだから、

変わらないほうがおかしいんだよな。

と。

結局鈴木は、自分から話した人意外に

目を変えたことをバレることは無かった。



## ドヤ顔になった鈴木

---

中学生の頃の部活の後輩が  
鈴木で紹介で同じバイトに入ってきた。

高校生の男子がバイト中に話す内容など

クラスの可愛い子がどうか

だれかがなんたら高校行って  
すげー美人と付き合ってるとか

だいたいそんな感じである。

要は女の話ばかりだ。

後輩は鈴木に対し、

でも先輩は彼女いなさそっすねーグヘヘえ

みたいなニュアンスを  
ちょいちょい織り交ぜてきた。

だが、鈴木が同じバイトの子と  
付き合っていることを知った際

後輩は驚愕した

「マジっすか!？」

「ま・・まじっすか！！？？」

鈴木の中学生の頃を知っていれば  
ビビるのもうなずける。

そして後輩のまじっすか顔を  
目の当たりにした鈴木は

## ドヤ顔になった

そして後輩からちよくちよく  
相談を受けるようになった鈴木。

いろいろな話をしたが、

いつも鈴木が抑えているポイントは2つ  
しかなかった。

それは、

第一印象と会話

これだけである。

これだけ普通以上なら、

人間関係も恋愛もそうそう、  
ヘタを打つことはない。

鈴木は高校卒業後、

モテ男やモテ女ばかりがひしめく  
接客業でバイトすることになったのだが

この2つのポイントを抑えることで  
平民以上の毎日を送ることが出来た。

とはいえ、  
人生はいろんな予期せぬ出来事もあるもの。

鈴木は高校卒業後、  
荒波にもまれていくことになる。

## 鈴木の過ごした10年間

---

高校卒業後、それまでとは  
まったく別人のような毎日を  
送るようになった鈴木。

顔で判断されない毎日になり、

自分の振る舞いも変わり

彼女を作ることに苦手意識が無くなり、

人間関係も大幅に変わり

自信が付いた。

それらのきっかけは

ただ

・ちょっとした行動を起こした

これだけだった。

最初のきっかけは  
アイプチを付けて外見を  
ちょっとよくしたこと。

そこからすべてが始まったのだ。

アイプチを付け、  
二重のクセが定着され

何もしなくてもずっと二重のまま  
いれるようになって

10年以上が過ぎたが、

その間にもいろいろなことが起こり、  
いろいろな経験、教訓を手に入れた。

それに関しては

こちらで恥ずかしい話から  
リアルなエピソード、アイプチテクまで  
お伝えしている。

[アイプチやめて10年経った今も整形なしで二重が継続中](#)

鈴木はこれからも

多くの恥ずかしい失敗や  
嬉しすぎる成功

いろいろなことを経験するだろう。

だが、どんなことが起こっても、  
これだけは確実に頭の中に  
常に置いておこうと思う。

行動しなければ、失敗はしない。

でも、成功は絶対に出来ない。

ということ。

[鈴木裕ツイッター](#)

鈴木裕メルマガ

[【1日3分アイプチフル活用講座】](#)